

容については、親鸞の関東での足跡が、善光寺聖の勧進活動圏とその経路に一致する点、真宗高田派本寺に伝来する善光寺式一光三尊仏、親鸞伝絵における「入西鑑察」や初期真宗教団で依用された四種の絵伝群から善光寺聖であったと措定することができる。

しかしながら親鸞の思想には、善光寺信仰は皆無に等しい。では、親鸞における善光寺信仰はいかなる意味を持つのであろうか。善光寺信仰の歴史的意義は、三国伝来の仏教、就中、浄土教を一般に弘めたところにある。この点に親鸞は着目し、聖徳太子信仰とともに仏教界に対しては念仏相承の正統性を、布教伝道においては三尊信仰を重用したのである。そして親鸞は、光明本尊の構成においてそのことを高度に具象化したのである。

存覚上人の行信理解における一考察

川野 寛

存覚における行信論を窺うに当たって、鍵となる語は能所という語である。なぜなら行信を論じられる際に存覚は、親鸞が用いられていない能所の語をもって為されるからである。

伝統宗学において大行論で用いられてきた能所の用法とは異なり、能所の用語は行信に亘っての解釈であることがうかがい知れる。存覚の行信論は明確に「所行能信」と示されるものである。能行能信、所信能信示、所行能行とも示されず所行能信と示されるところに存覚の行信論の特徴がある。所行が機に至

りて能行となるのではなく、大行とはどこまでも仏の所行、所帰の法のままである旨を示されている。ではなぜ宗祖の上で用いられていない所行という語で大行を明かされたのかという問いが起るが、これはただひとすじに宗祖の顕彰された「他力回向義」の顕示のためであると考えられる。所信能信と示せば、名号が現行というよりも向こう側に眺めていうような、一種の抽象的な理である感を受ける。能行能信という語で示せば、仏の行というものが機についての行という感を受ける。

存覚において仏の行(所行)の他、まったく衆生の行なしという意で、どこまでも所行のままである。行者が称えたら能行になるのではなく所行のままである。機において称えられてもどこまでも所行のままというのが他力回向の大行の義である。存覚においては今現にすでに所行海の中に身を置いて、存覚の口について名号が称えしめられているという現行の所談である。その際所行能信という語は、他力回向義の顕彰にもっとも適した用語であったのであろう。後世の能行ということも所行の法に込められて説かれている。では存覚において能行とはなにを指すのかという問題であるが、能の配当はやはり機につきべきではないだろうか。「能修の行者」「念仏人」「能行の人」と示されるが如く能行はやはり能信の機に配当されるべきものと考えられる。

次に信、能信の解釈であるが、宗祖においても信のはじまりは行巻にはじまるのであるが、存覚においても行巻釈においてしばしば能信の釈が施されている。伝統宗学における能所は主に大行論での所論であるが、存覚において能は信の解釈中であ

り、能信、能帰心等述べられている。能信を示すには所行との関係性を考察しつつ論じてゆきたい。行信の関係において存覚は「信行不離・機法是一」等と示され、行と信というように離して論じることなく、不離、是一の関係を強調されている。所行(行)能信(信)不離であって、能信(機)所行(法)是一である。なぜなら所行の法のほかに能信があるのではなく、また能信のほかに所行の法はない。行巻釈において所行の法に就いて能信の名を挙げると示されるのは、所行法全体のなかに能信が込められているという釈であると考ええる。また能信とは所行の法によるがゆえ、能信全体に所行の法がある。

存覚においては行信を解釈するにあたって、能所という語を用い所行能信と明かされたのであるが、これは特に親鸞が説かれた他力回向義の顕彰のためであったと考える。さらにその行信の不離、機法是一ということとはしばしば強調されたところである。もともと古い宗学として、脚光を浴びるべき行信論であると考ええる。

環中の廻心についての一考察

——『正中録』著述の真意——

西原法興

環中は前惑乱期より願生帰命説に関与した学僧であり、その研究は教学史上重要である。

彼は元来願生帰命派であったが、大瀛の『横超直道金剛録』が出るや翻然と廻心して帰正したとする説があるのに対して、

捨邪帰正の事実はなく終始一貫した正意安心の学匠であると主張する説との双方が存在する。そこで廻心の有無の問題に加えて、『横超直道金剛録』後の著述『真宗安心正中録』(以下『正中録』)に於ける結論である「正中」に關してもその真意が解明されねばならない。

まず『願生帰命弁』(宝曆十四年・一七六四)における功存教学の焦点は、①三心即一は欲生一心におさまる②たのむとは三業を表相するものという二点であるが、その継承者である環中は『建幢摧邪篇』(寛政元年・一七八九)の中で、①たのむは帰命の義・願生安樂の義②欲生は信樂の相③信樂正因は十劫安心④三業表相は勸門の施設と論述している。

一方、寛政十一年(一七九九)の『真宗法輪碾録』は『浄土真宗金剛録』(寛政九年・一七九七)に説示される別取信樂説を批判する書と考えられる。環中に一貫した思想は、衆生の至心欲生の二心を廃捨することを批判し、至心信樂の二心を離れた欲生ならば、それは弘願の欲生ではないとする。大瀛が機側で語るの信樂のみであるとし、至心欲生には即一を語らないのは誤りであるとし、至心信樂欲生の三心は皆一心であることに力点を置いて、機の側で至心欲生の二心も論じなければならぬと言ふ。信樂と欲生は体と相の関係であるから、体である信樂は相を具えているとし、強く欲生を前面に出すのである。即ち大瀛は別取信樂説を立てて願生帰命説を破斥せんとするが、環中は逆に此説を以てそれを救釈しようとしたのである。

次に、廻心の契機となったと云われる『横超直道金剛録』(享和元年・一八〇一)以降に刊行された著書『正中録』(文化